

ウェルフェアトレード

ウェルフェアトレード——ポツポツと聞こえ始めてきたこの言葉は、障がいのある人たちがつくったモノを対象に使われることが多い。けれども、“福祉”と“公正な取引”の造語であることから考えると、その分野はさらに広く、多くの可能性を感じさせる。

今回は、活動している人やグループの取材を通じて、ウェルフェアトレードについて考えてみたい。

「WelfareTrade（ウェルフェアトレード）」とは、「Welfare＝社会福祉」と「Fair Trade＝公正な取引」を掛け合わせた造語で、社会的弱者と呼ばれる人たちがつくる国内の製品やサービスを、適正な価格で購入・利用することによって、当事者の人たちが、働く喜びと生きがいを持ち、自立できることを支援する仕組みです。対象としているのは、障がい者が働く福祉事業所（社会福祉法に基づく授産施設や、それ以外の小規模作業所など）でつくられる製品や加工品、農産物をはじめ、仕事や家を失った被災者、在宅のケアラー（介護者）や母子家庭、児童養護施設の退所者で行き場のい若者、ホームレスの支援グループなどによる製品やサービス、刑務所作業製品なども含みます。（Motherness のウェブサイトより引用） <http://www.motherness.com/>

福祉作業所の手づくり商品と消費者との出会いを創造する

巻頭インタビュー

羽塚順子

羽塚順子さんは執筆者・編集者として取材を重ねるなか、デザインやキャッチコピーなど、編集の力で福祉のイメージを変えられないか、社会的に弱い立場の人たちの仕事づくりをクリエイターや一般の人たちとつなぐ支援ができないかと、「ウェルフェアトレード」という言葉をキーワードに、商品企画開発や販売促進支援を行うようになったそうです。

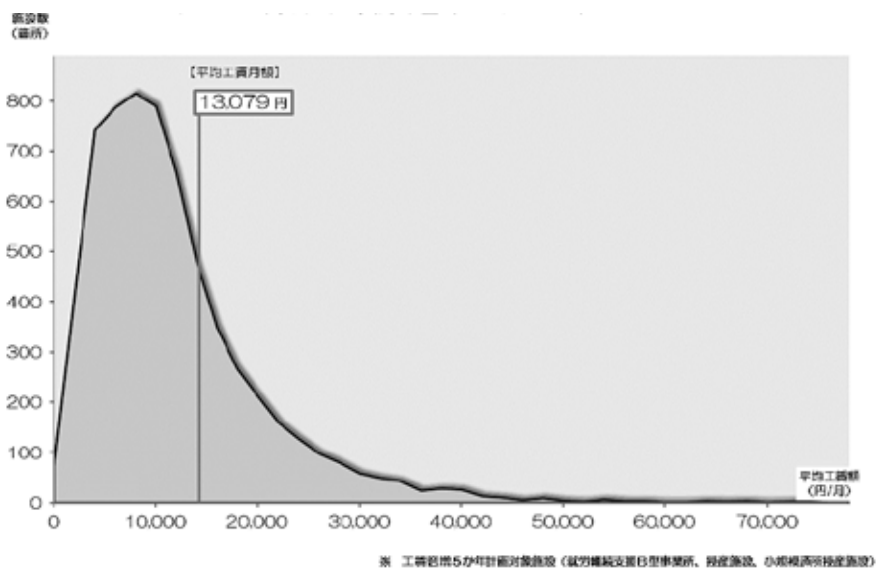
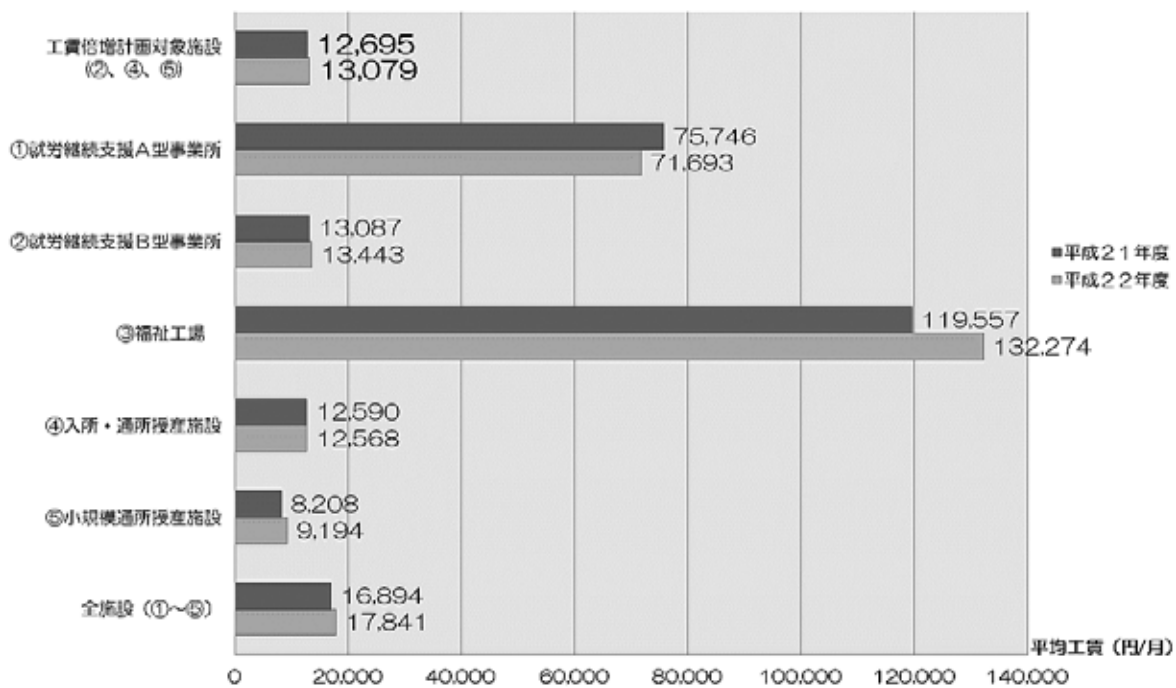
ウェルフェアトレードとは何か？
また、ウェルフェアトレードの意義とは？——羽塚さんの活動や事例とともに考えます。

ウェルフェアトレードは、国内のフェアトレード

——ウェルフェアトレードとは？

ウェルフェアトレードの定義は私が代表を務める Motherness のウェブサイトで紹介しています。福祉施設でつくる自主製品が「授産品」と呼ばれてきたので、それに代わる言葉を使いたかったのと、国際協力活動により「フェアトレード」は浸透してきていたので、国内のフェアトレードという位置づけで「ウェルフェア（福祉）」を掛け合わせるとわかりやすいかと思ったのです。その前から、西水元福祉館さんなどと取り組んでウェルフェアトレードソープを扱っていた生活の木¹さんが使われていましたし、エクスクラメーションスタイル²さんなど、先進的だと思った福祉施設さんたちにヒアリングもしました。同じ頃から、マジエルカ³（障がい者がつくるハンドメイド雑貨専門店）さんもこの言葉を使われていました。

2012年3月に、財団法人ヤマト福祉財団⁴の助成で『福祉商品と本当に必要とする消費者との出会いを創造するマッチング事業の調査・研究』という報告書を発行しました。おもにウェルフェアトレードのマーケティングリサーチとして私が取り組んだことを、社会福祉法人光明会



(上)施設種別平均工賃(平成21・22年度)と、(下)平均工賃分布図(平均工賃別施設数、平成22年度)。
厚生労働省「平成22年度工賃(賃金)月額の実績について」より引用。

さんがまとめて発行してくださったもので、施設の現状や好事例紹介、調査研究から提案する着眼点等を掲載しています。

かわるすべての人が 幸せになるしくみ

——ウエルフェアトレードの 意義・必要性とは？

まず、障がい者の福祉施設⁵の工賃の問題があります。工賃とは、物を製作・加工する労力に対する手間賃。福祉作業所の目的は就労支援・訓練で、最低賃金が適用される⁶就労とは異なります。工賃は、作業所の売り上げから経費を引いた金額となります。厚生労働省の発表では、平成22（2010）年度の平均工賃は一人当たり月額13079円（図1・2）。福祉工場⁶だけが突出していて、10万円以上というところもありますが、現状では施設のひとつが1万円以下。多くの施設が訓練の名のもとに、安価な下請けや孫請けという状態で、3000円程度のところも少なくないのです。

厚生労働省が平成19（2007）年より「工賃倍増5か年計画」⁷を実施しましたが、その対象施設の平均工賃は23年が14947円で、伸び率は119.6%にとどまりました。同省では十分な工賃となり得ていないと、24（2012）年度より「工賃向上計画」⁸を、25（2013）年4月からは「障害者優先調達推進法」を施行するなど、都道府県や自治体と福祉事業所（作業所や工場）が共同して取り組むことを重視し、その支援を行っています。

もっと工賃を支払えるようにと努力を重ねる施設や職員さんも多くさんいますが、オリジナルで企画・製造から、受注、販売までの「設計」を、職員さんだけで行うことは非常に困難です。工賃アップを図るには、働く障がい者の人たちのモチベーションの向上や人間関係、製造・生産、販売体制の充実といった、つくり手側の問題を解決するほか、消費者のニーズにかなった「商品」にまで高める必要があります。それを支援するしくみがウエルフェアトレード⁹だと考えています。

また、ウエルフェアトレードの普及は、施設で働く障がい者の人たちの

のことを理解してもらう啓発につながります。特に震災以降、買い物で社会貢献したいという意識は高まっていますから、消費者に商品背景やストーリーが伝われば、気づきや勇気を得る人々はもちろん、働く喜びを得る障がい者も増えます。それが社会を変えていく力にもなると思っています。

——羽塚さんがかわった ウエルフェアトレードについて。

福祉商品、つまり福祉事業所の手づくり商品と直接かわるようになったのは、2009年です。ブログに福祉商品の紹介をたくさんアップしていた公益財団法人日本財団の山田泰久さんに連絡を取り、全国から福祉商品が集まる展示会に参加したり、試食会を開いたりしました。

そして、全国の福祉事業所の食材を集めて紹介する、ウエルフェアトレードパーティを都内で開催したとき、そのパーティへ、みとおし⁹の施設長が情報をキャッチして山梨県から参加してくださったのです。施設長は会場で「障がい者を起業家にしたい」と語りました。その当時、

私は山梨の桃の代行販売をしている経営者を取材して「桃農家で規格外品は埋めてしまってもったいない。傷ものを小ロットで加工してくれるところがあれば紹介してほしい」と言われていたので、この施設長をご紹介したのです。

ちょうど同じ時期、仕事仲間から結婚式の引き出物を頼まれていたので、結婚式の引き出物として、その桃をコンフィチュール（ジャム）にしようという話になり、LOVE&Peach（ラブアンドピーチ）という商品ができました。その後、「規格外品」は種類を増やし、さまざまな商品へと発展しています。

ウエルフェアトレードにかかわるには、工賃アップが一時的なものではなく、継続的な仕事にしていくことが重要だと思うのですが、そこが一番難しい。そのためにまず顔の見える関係づくりをしています。たとえば、引き出物のプロデュースの依頼があったときに詰め合わせの作業を新郎新婦にも体験していただき、そのことによって、どんな人たちが、どんな行程でつくっているかを間接的に知ることができます。挙式の際、

私がゲストの皆さんの前で、引き出物の紹介をさせていただくと、ゲストの皆さんが驚いた反応をされます。つくり手から売り手を通して買い手へ、そして買い手の家族や友人へとつながっていく、そんな顔に見える関係づくりができればと思っています。

— ウェルフェアトレードの

めざすところは？

ブランド化¹⁰です。福祉施設は小規模のところが多く、一般の商品との対等性を目指すことは、コスト、価格設定、宣伝等、さまざまな面で非常に難しいですね。その代わり、商品に意味を持たせたり、製造工程に思いを込めることができると考えています。

たとえばこのごろの挙式は、新郎新婦が、親族や友人に感謝や将来の意志を伝える場になっていると感じます。そのために、引き出物も既成のものではなく自分たちで考えたいという人が増えています。二人が「私たちは誰かを応援する夫婦でいたい」という意志を伝える手段としてのウェルフェアトレードに可能性が

あります。意志ある引き出物は、受け取る人たちも嬉しいし、自分のつくった商品を通してお祝いに参加できる施設の人たちも喜ぶ。

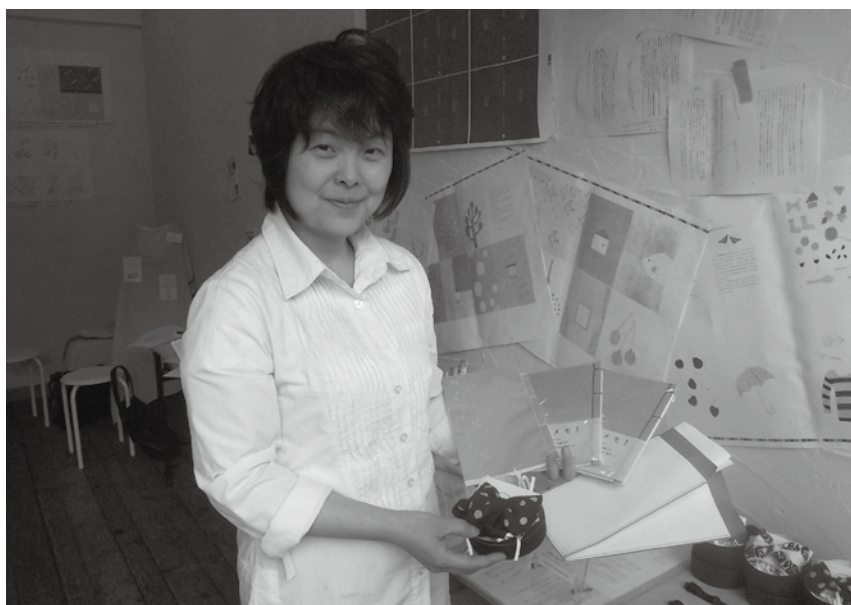
また、作業所で働く人の親御さんが「うちの子にこんな素敵なおもいがつくれるんですね」と感激されたりします。ウェルフェアトレードは、

買い手を伝道師として、かわるすべての人が幸せになるしくみにもなり得るのです。

広がる

ウェルフェアトレードの可能性

さて、ブランド化したところで、次の課題となるのは販路です。独自に販路開拓するのは難しいことですが、すでに販路をもっている企業とコラボレーションする方法があります。公言していない企業もあるのですが、施設と組んで事業を行っている



ゲラメモ、ゲラ封筒(試作品)、Musubi-Tie(結びタイ)を持つ羽塚順子さん(写真上)。Musubi-Tieは、大阪の注染職人集団「にじゆら」より提供された布を福祉施設で縫製しているボウタイ。PRe Nippon(本誌8ページ*参照)では、職人技術を継承するための「いにしえ職人基金」を立ち上げ、職人育成のための寄付を行っている。注染とは布に模様を染める技法のひとつで、手ぬぐいや浴衣などの伝統産業で使われている。2013年のゴールデンウィークには、鎌倉のギャラリーでPRe Nippon展「これからの人、職、Nipponのために」を開催(写真下)。

